

〔報 告〕

## まちづくりはふるさとづくり

——飛驒古川町を訪問して——

内 田 忠 男

94年11月26日(出)、27日(日)の二日間、地域経済研究所のメンバーは、飛驒古川町を訪問し、地域おこしの先頭に立っている方々からお話をお聞きし、由緒ある街並みを見学した。本学から参加したのは柿本所長、間仁田幸雄教授、木村隆之教授、鈴木誠助教授、梅田守彦助教授、太田正助教授、高橋正紀講師、岡本高廣研究課課長、それに内田忠男である。

先方でお話をいただいたのは、「木の国ふるさとづくりの会」の会長、村坂有造さん、「飛驒古川国際音楽祭」の実行委員長、下出剛史さん、それにスポーツ部門から「木の国ふるさとづくりの会」の副会長で「名古屋グランパスエイト飛驒校校長」の洞口博さん。それに翌日には町役場商工観光課から畑上あずきさんにおこしいただき、古川の街並みを御案内、御説明をいただいた。

以下はこの二日間の簡単なレポートである。

26日(出)12時半頃、二台の車に分乗して本学を出発。郡上八幡郊外のドライブインで昼食をとった後は、葉が枝に枯れ残る「せせらぎ街道」をまっすぐ北上し、峠のまだら雪に驚きながら、しかし何事もなく無事に清見村そして高山を通過、予定時間より少々遅れて飛驒古川町町役場に到着した。(裏日本とよぶにふさわしい、変幻極まりない空模様の下、飛驒古川の街は静かで、人氣がなく、おちついてた。)

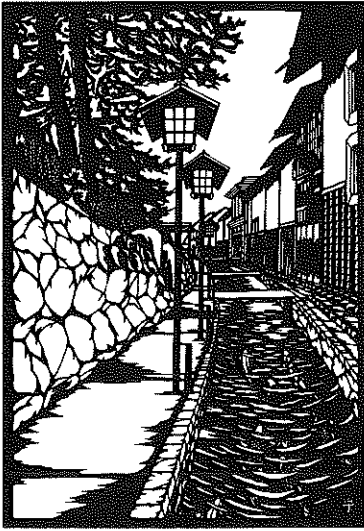
遅刻をまずお詫びして、町役場の会議室で早速、古川の町起こしに尽力しておられる方々のお話をいただくこととした。

まずは村坂さんの総論から。

### まちづくりはふるさとづくり

町づくりという言葉が簡単につかわれているが、町にはさまざまな要素や、needsがあるのだから、仲々一つのものへとまとまるものではない。まとめるためには、積極的に人が介入しなくてはならない。飛驒古川ではそうした人、リーダーの役割を果たしたのが、当時「青年会議所」に集まった人々だった。「古川はいい所ね」という声を有名人から聞き、これを発奮剤として、飛驒古川を「明るい地域社会」にそしてみんなの「ふるさと＝故郷」にしようと3カ年に渡って討議・検討し、街の映画づくりに頑張った。この間の経験・成果が今をつくり、亦今も活きつづけている。目指してきたのは、この「ふるさと」をつくることだった。町の住民が、安心して生活できる場、人と人が、人と土地が、人とモノが満足した関係にある場、それが「ふるさと」なのだと考え、「われわれは町起こしで、人のつながり、生活のゆとり、一定のモノが備わる暮らしをつくらうとしてきたのだ」と、熱っぽく、かつユーモアもまじえて語られた。

こうした努力が続けられるなか、3年程前に町政担当者が変わり、下からの「まちづくり」の声に耳を傾け、提案も取り上げてもらえるようになり、参加が始まることとなる。「起し太鼓の里」とその会館づくりが最初の成果だった。町の年予算の1/2の支出額で、建設されることとなった。「起し太鼓の里」は、町役場から、道一つをへだてた西隣りにあり、「飛驒古川まつり会館」や「飛驒の匠文化館」らの建造物を配置した、広いスペースである。飛驒古川観光ルー



瀬川

トは、ここから始まり、街並みを瀬戸川に沿って南行し、風情のある酒造りの家並みを散策して、ここへ戻ることとなっている。）

「ふるさとづくり」につながる試みとして、古川に続けられていたものに、音楽祭活動があり、16年間にわたっている。フル・オーケストラを生で町民にエンジョイしてもらいたいというところから始められたものだ。これは今、古川国際音楽祭として結実している、と続き、村坂さんから、「飛驒古川国際祭」の実行委員長下出さんに、レポートは、バトン・タッチされることとなった。

下出剛史さんの談話。

### 音楽の森づくりを目指して

古川の音楽活動の原点は、生の音楽を町民に聴いてもらうことにある。16年前、東京フィルハーモニー富山公演の後、飛驒でもどうかという誘いを受け、青年会議所のメンバーが期間1ヶ月という慌ただしい準備のなかで、見事1,800枚のチケットを完売し、公演を成功させた。この経験から自信を得て、以降いろいろなコンサートを企画して招致してきた。町には固定層、常連も出来上ってきている。この基礎の上で、創造も志ざして、地元の合唱団づくりを進めて

きている。現在構想は、もう一步前へ出て、専用のホールを備えるだけでなく、練習それに宿泊施設もとのえた「音楽の森」づくりにある。この「音楽の祭」は「ふるさとづくり」のもう一つの環であるスポーツ活動の場づくりとも連携して考えている。

ここで、洞口さんへと「たすき」が渡されて、「スポーツによる町づくり」の構想が語られることとなった。

### —スポーツ学校(Sport School)を作る—

飛驒古川の土地の有効利用として、「音楽の森」に隣接して、「スポーツ学校」を設ける構想である。ドイツの Sport School に範を得て、青少年のサッカー研修を、名古屋グランパスのプロ・プレーヤーの協力をあおいだ上で行おうというプランは、年間2,300万円の支援金のメドもついて、スポーツ・シューレー・飛驒」として歩み出す方向にある。この宿泊・研修施設は、地元・青年の働く場所として大いにすすめたい。単純なサービス業の雇用といったものではなく、指導員（スキーやサッカーの）といった、単調ではない労働の場を提供する、機会と考えたい。

以上のレポートが語られる間に、われわれの席には、「木の国ふるさとづくりの会」が作成した、冊子・建議書、パンフレットが廻ってきた。なかでも「一人と縁のエコロジー—まちづくり 提言書 [木の国ふるさとづくりの会]」は、「町民がみんなで担ぐ明日のふるさと」と副題をそえた、分厚いもので187頁にもなる、飛驒古川まちづくりの宣言とも言える大著であった。その他町議会議員にと用意された冊子もあったが、まだ公開は出来ないとのことであった。

以上、熱のこもった報告をいただいた後、質疑応答となったが、以下かいつまんで飛驒古川のまちづくりをみでみることにしたい。

まずは音楽関係から。

「国際音楽祭」を担うのは「飛驒古川音楽文化協会」で、双方の長は下出さんだが、この協会のあらましをうかがった。

協会の会員は70名前後、年間会費5,000円で組織され、音楽祭等を企画・運営している。音楽祭には、国・県・町からそれぞれ1,000万、計3,000万円が支給されている（地方文化拠点都市に選ばれたため）、文化協会はこの支給金の範囲内で事業をすすめているとのことであった。恒常的組織体として財団法人化を考えているかとの質問には、原資が無く、町にも出す用意は無いから、遠い明日の話だとのこと。3,000万円の支給（協賛金）と一率3,000円の入場料で、800~1,000人の聴衆、ここからギャラと公演設備に要する諸費用をまかなうのだから、まさに協会員らの手弁当で運営される「国際音楽祭」ということになっている。洋楽だけでなく、種々の和楽をも提供する企画で、大体年間2,000~3,000人の参加者を、もっぱら飛騨圏から得ているとの旨であった。

スポーツ・シューレ関係では、

スポーツ・シューレは、学校教育とは切り離された、社会教育の場として発展させたい。地元で伸び育ってきた人々を、子供であれ大人であれ、1人の人間として更にその能力を開花させる、そうした機会を与える場、施設として考えている。そしてここからクラブ・チームを育てたいとの抱負が語られ、資金的後づけとしては、10億円を町から8億円を起債で得て、18億円の規模でスポーツ・シューレを設け、サッカーとラグビーのコートを10面用意し、年間35%の運動、宿泊施設の可動率を長期滞在・低価格で実現したいとのことであった。

次いで、「起し太鼓の里」構想が実現した今、「音楽の森・スポーツ・シューレ」など、「木の国ふるさとづくりの会」がすすめようとしている企画、構想には、それほどかかると考えているのかとの質問が出たが、回答は、予算額125億円、これはほぼ全額起債でまかないたい、町の施設としてづくり、運営は民間と町の、いわゆる第三セクターに委託する方針であるとのことであった。

街並み景観に関する質疑応答から。

飛騨古川の街並み景観を客観的に評価してもらおうと、ナショナル・トラストに依頼し、積

極的な回答をえた。この機会に1億円で「飛騨の匠文化館が、(財)日本ナショナルトラストのヘリテージセンターとして建設され(1989)、木工の里古川を象徴するものとなった。古川の街並み景観は古いものではなく統一した町屋建築が並んでいるのは、明治37年(1904)の大火後一せいに飛騨の大工によって再建されたためだとのこと、景観地区で今新築された建築物は、伝統的町屋づくりになっているが、町などから補助、助成金を出して誘導しているからではなく、地区の住民の自発的な意志からであり、せいぜい観光協会からデザイン賞の賞が出るのみであるという興味をそそる回答もあった。家の軒を受ける腕木にほどこされているデザインは「雲」とよばれ、古川の街並み景観の一大特色となっている。が、これとても、第二戦大戦後の昭和29年頃に考えだされた、大工さんの商標、「この家は私が建てましたよ」というシンボル・マーク。多種多様な雲が、デザインをこらして飛騨古川の町に「浮かんでいる」のは、それだけ飛騨の匠の層が厚く、沢山の匠さんが働いていることの証である。街づくりに統一感を与えるために、建築にあたって一定のGuide Lineをつくる必要があるのではないかと、ナショナルトラストにプランづくりを依頼しているとのことである。

### 「木の国ふるさとづくりの会」とは

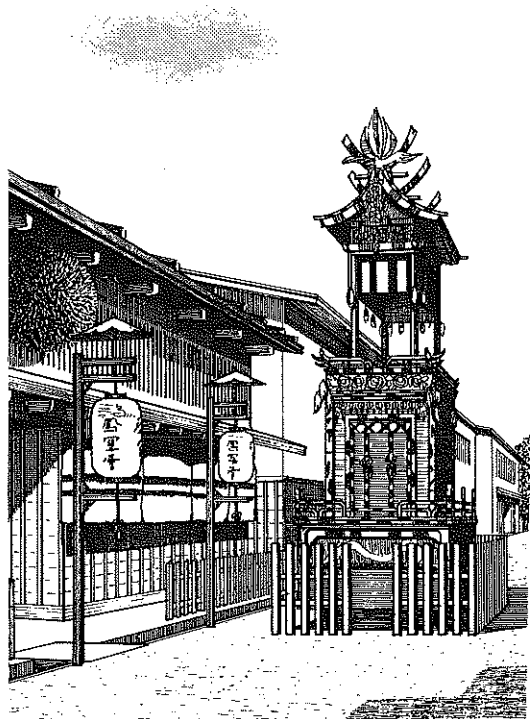
古川の街づくりの構想を推めているこの「会」は、どんな人々で構成されているのか、との質問には、かつて青年会議所で一緒にやっていた中年層の他、町の多様な年齢・職業層から参加があって会員数約120人、町民1万6,000人の1%弱を組織するとのことであった。(古川で生計の資を得ていなくても、高山・神岡などの隣接する雇用・営業先であれば、通勤時間も僅かですみ、地域活動に十分な時間をさけるのであろう。まちづくりの志をもった人々が積極的に、ヴィジョンをもって町に働きかけるなら、どれほどのことが出来るのかを示す例でもある。)

## 着実なまちづくりを目指して

飛驒古川の象徴ともなっている「まつり会館」は入場者10万人（年間）、1,000万円の年商があり、観光客を満足させる施設になっていると思うが、古川は観光・サービス業を目指すというのではない。第一次産業（農業）を育成し、その作物を加工（付加価値をつける）し、出荷する方向、高価値付加的農業・工業を実現したい。露地だけでなく温室も取り入れ、今すずであるしいたげづくり以外にも手を広げたい。それに高山市の後背地といった土地立地を生かした健全な分業の上に立ったまちづくりを、あせらず着実に進め、住民が安心して生活できるふるさとを実現したいとのまとめがあった。

15時50分から始まった、説明と質問の集いは2時間を超え、町役場の会議室から場をうつして会食・懇談を続けることとして散会、しぐれの寒い街を、宿泊を予定している「常茂恵ホテル」まで車を走らせることとなった。

### 第二日



しぐれが断続する、変わり易い天候の中、古川町の企画商工観光課から来ていただいた、畑上あずささんに街並みを案内していただく。出発点はやはり飛驒古川の観光シンボル、「起し太鼓の里」の「飛驒古川まつり会館」から。

「まつり会館」は、4月19・20日の2日間行われる古川祭り、起し太鼓の行事と屋台行列を、立体画像で再現する映画の上映、それに屋台の陳列、そのからくり人形の実演のほか一刀彫り、きり絵など伝統的な工芸技術を紹介するコーナーも備えた施設である。われわれは関西方面から、奥飛驒温泉郷をまわってきた観光客の、数グループと一緒に目撃した。屋台は飛驒の匠たちのすぐれた腕を示して、常時一台が陳列されている（実際に祭りに参加する）が、外には出ない近年作もあって目を奪われるが、「八紘一字」を刺しゅうしたどん帳らの展示もあって祭りの歴史的な流れをも教えてくれるものになっている。

隣接して「起し太鼓」を展示する棟もあって、実際にバチをあてることも出来、同館見学の肩の凝りをほぐすことも可能、早速試みた所員もいたようである。

さて、水温がさがるため「鯉」を暖地に疎開させて水位も落としている瀬戸川に沿って街並みを見学の散策、真新しい「雲」がさかんに目につくが、これは古川で新築が続いている証し、町が活性を保っている証明でもある。「白真弓」、「蓬萊」といった地元の造名酒を造りつづけている造り酒屋の並ぶあたりは、古川祭りを照らす提灯づくりの古舗や、「和ろうそく」の工房もあって、景観の中心部分である。われわれは、この江戸時代からの伝統を守り続けている「和ろうそく」の店舗、「三嶋屋」さんを訪ね、ろうそくをつくる工程を見、由来と作り方、利用例、販路などをおききした。手間、ヒマをかけた作物が和ろうそくだと実感、大小とりまぜてスーヴニールに買い求めた所員も多数あった。

小一時間もかけず街並みの主要部分をまわって、「飛驒の匠文化館」で道具、木組みなどを見学、さて冷えた身体に活力をと、「まつり会館」に付属するフランス料理店に赴く。「予約客で一

杯、だいふ待ってもらわないといけません」という、観光古川にはうれしい回答のため断念。われわれは畑上さんの案内で古川駅近くまで戻って、地元の特産「飛驒牛」を賞味することとなった。

本来の予定では、ここから更に北上して神岡にある東大の宇宙線研究施設を見学することになっていたが、研究者が休暇で不在とのこと、それにみぞれも続いて道路も不安、次回を期すこととして、われわれは昼食後帰垣することとした。途中清見村の「木工館」、「道の駅」などの施設に立ち寄り、いろいろな特産品、土産物が開発、販売されているのを見学、ここでもいろいろスーヴニールを集めたものであった。

